



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自立を通じた親子関係の変化と繋がり再検討：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	濤岡, 優
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16316号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95449
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	NAMIOKA_Yu_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：濤 岡 優

主査 准教授 加 藤 弘 通
審査委員 副査 教授 守 屋 淳
副査 教授 沼 田 あや子（立命館大学）

学位論文題名

自立を通した親子関係の変化とつながりの再検討
：関係の中に生きる者が自立を目指すことの意味とは

本論文は、親子における自立の意味を「関係」の視点から問い直すものである。従来の心理学的研究では、自立を外在的な視点から捉え、親と子が個として分離し、対等な関係へと移行する過程、即ち「親子が親子でなくなっていく」ような変化として描いてきた。しかし、現実には自立を果たした後も親子関係は続き、親も子もその関係の中で生き続けている。そこで本研究では、以下の3つの課題を親と子の内在的な視点から検討した。

①自立を通して、親と子はそれぞれの立場から親子関係をどのように経験しているのか。
②自立を経た後も、何が親子を「親子たらしめている」のか。
③親は親であると同時に、自らの親との関係において「子」としての親子関係も生きている。このように、複数世代にわたって親子関係を経験するとはどのようなことなのか。これらの課題を通じて、「個」としての自立ではなく、「関係の中に生きる者」にとっての自立の意味を明らかにすることが本論文の目的である。

研究1・2では、課題1「親子関係をどのように経験しているのか」を検討するために、自立を経た2組の親子を対象に面接調査を実施した。その結果、子どもは自立を通じて、それまで無自覚かつ受動的に享受していた「子」という立場を、自覚的に引き受け直すことが明らかになった。つまり、受動的な子から能動の子へと変化し、「子になり直す」過程として自立を経験していることが示された。一方、親は、自らが担ってきた子育ての意味を子どもの人生に委ねつつ、「歳を取る姿を見せることも子育て」といった新たな形で親であり続ける姿が見られた。即ち、親は役割を終えるのではなく、新たな形で「親になり続ける」過程として自立を経験していることが明らかになった。

研究3・4では、課題2の「何が親子を親子たらしめているのか」を検討するために、親子という繋がりを自明視することが困難なケースを対象に、面接調査を実施した。その結

果、子の立場から見ると、どれほど親を否定しようとも、親から生まれ・育てられたという事実そのものを否定することはできず、親は「自らの存在の始まりの地点を共有する他者」として経験されることが明らかになった。

一方、親の立場では、子どもの人生に関わることができないという経験をしながらも、それでもなお、子の生存を願い・思い続けざるを得ない姿が浮かび上がった。その背後には、「親である自分は、子どもにとって選ぶことのできない存在である」という認識があり、それは同時に、親自身にとっても「関係を勝手になかったことにはできない」という意味で、選択不可能なものとなっていることが明らかになった。すなわち、親と子は、それぞれの立場で「選択不可能性を共に生きる」という経験をしていることが示された。

研究5では、課題3の「複数世代のなかで親子関係を経験するとはいかなることなのか」を検討するため、協力者のうち「親と子の両方の立場をもつ者」に焦点を当て、複数世代のなかに位置づけ直し、「親であり子である者としての世代的つながりの経験」を検討した。その結果、複数世代を生きることは、単に何かを継承する関係に留まらず、次世代との関係においては、自らの存在を確かにし、前世代との関係においては「はじまりの地点」にたどり戻るという経験をする過程であることが明らかになった。

以上の検討を通じて、本論文は、「関係の中に生きる者」ととしての自立を、前へ進めば進むほど自らの存在の始まりを問わざるを得ない過程であり、関係から完全に切り離されることのない自己の在り方と向き合う過程、すなわち「自立できないこと」と向き合う過程と捉え直した。そして、自立の意味を「関係の中でどのように生きるか」を模索するための経験と位置づけ、結論とした。

審査委員会は、本論文の意義を、「人が生き、自立すること」を単なる直線的な世代継承の一部としてではなく、過去と未来の関係を重層的かつ循環的なつながりの中に位置づけ直した点にあると評価した。この視点は、従来の発達心理学における一方向的な発達観への反省を促すものであり、新たな研究の視点を切り拓く可能性をもつことから、理論的にも高く評価されるべき研究であると判断された。

ただし、自立に関する議論は心理学のみならず、障がい学など他の領域においても行われているが、本論文ではそれらの検討が十分ではなかった。また、親子関係を「どのように認識しているのか」と「どのように生きているのか」の関係をより明確にし、後者に迫るための方法論をさらに洗練させる必要があるといった課題も指摘された。

しかしながら、「関係の中に生きる者」という視点から自立の意味を問い直し、従来とは異なる発達観を提示した本研究のオリジナリティは高く評価されるべきである。以上の点をふまえ、審査委員会は、本論文の著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与されるに値すると認めた。